# 「植民地忘却」と「ホロコースト忘却」

高橋秀寿

## 1.

まず，第二次世界大戦後に日本の研究者はどのような問題関心に基づいてドイツ現代史を研究していたのかについて説明してみたい。なぜ日本はファシズム国家になってしまったのか――これが，「戦後歴史学」と呼ばれる研究潮流を形成した研究者たちの最大の問題関心であり，この研究者たちはその分析モデルを欧米諸国の近代化類型に求めた。すなわち，イギリスやフランス，アメリカなどの先進的な西欧国家は市民革命を成功させることによって，民主主義が社会に根づき，ファシズムに抵抗力をもちえたが，ドイツやロシアなど後進的な中欧・東欧国家はその革命を徹底的に遂行することができず，封建的な勢力を政治と社会に温存させてしまったという。ドイツは，市民革命の「挫折」とファシズムの成立が結びついた典型的な国家として分析され，とくに隣国のフランスとの対比において歴史的判断を下された。明治維新を市民革命として評価せず，この革命の完遂を第二次世界大戦後の復興の課題とした「戦後歴史学」にとって，フランスはポジティヴな，ドイツはネガティヴな近代化のモデルとなった。フランスは開かれ，普遍的すなわち文明的で，民主的な国民共同体を形成し，ドイツは排他的で，個別的すなわち文化的で，人種主義的な民族共同体になっていった，と。

今日からは一見奇妙に感じられることだが，この研究者たちはホロコーストやドイツの戦争犯罪の分析にあまり熱心ではなく，その主な関心はファシズム体制の成立過程にあった。「反近代的」で，非民主的な独裁体制がそのような歴史的犯罪を引き起こした原因であるという暗黙の前提が，そこにはあったからだといえよう。逆に言えば，「近代的」な民主的体制の国家はそのような犯罪とは無縁であるということになる。この前提には，地球の大半を占めた植民地の宗主国の大半はこの「民主的」な西欧の国民国家であったという歴史的事実が忘却されている。あるいは，文明的で，「民主的」な国家による植民地化が暗黙のうちに肯定されているといってもよいだろう。西川長夫の表現を借りれば，「戦後歴史学」は，西欧諸国を見習うべき歴史的モデルとすることによって，過去に自らが植民地化していたことの感性も，その後は自らが植民地化されていることに対する感性も失っていたといえるかもしれない。

今日からはもっと奇妙に感じられることだが，第二次世界大戦後のドイツ人自身も長らく，ホロコーストを自らの問題として感じていなかった。例えば，終戦後のドイツを訪ねたハンナ・アーレント[1]は，当時のドイツ人が，会話の相手がユダヤ人であると知ると，「ドイツを出たあとにどこに行っていたのですか」といった個人的な質問もせず，「あなたの家族はどうなりましたか」といった同情もあらわさず，ドイツ人の苦悩の物語がその口から溢れ出していたと指摘している。そして，教養層や知識人の場合には，「ドイツ人の苦悩と他者の苦悩の帳尻を合わせようと試み，そうすることで，お互い様なのであり，もっと生産的な話題に取りかかった

ほうがよいだろうと言いたげであった」という。このように「現実に起こったことを直視し，受け入れることを頑固に，ときどき悪意をもって根深く拒否」するドイツ人の態度の現象として，死者を追悼する（英語ではmourn，ドイツ語ではtrauern）心情の欠如をアーレントは挙げている。周知のようにこの問題を体系的に取り上げたのが，1967年に刊行されたミッチャーリヒ夫妻の論文"Die Unfähigkeit zu trauern"（「追悼することの不能」）である。[2)]

フロイトの精神分析理論に基づいたこの論文によれば，愛情関係には二つの形態が見出される。第一の形態は，愛する対象が他在（Anderssein）しており，その対象に部分的に自己同一化する感情移入的な愛情である。ここでは，対象が他在しているがゆえに，自己はこの対象を取り入れることで豊かになる可能性をもつ。第二の形態が，対象の選択が自己の空想との合致によって決定され，自己価値を確認することに執心するナルシズムに基づいた愛情である。ここでは自己が対象との間に距離をとる可能性は失われ，対象は自我に過度に侵入する。ミッチャーリヒによれば，ドイツ人のヒトラーへの愛情はこの後者によるものだった。ドイツ人はヒトラーを自我理想に代替させ，そのため彼の価値が自己のものとなり，ヒトラーは「集団的自我理想」を表象することになったという。

愛の対象が失われ，そこに充当されていた心的エネルギーが失われたとき，この二つ愛情形態は異なる反応を示す。第一の形態では追悼で，第二ではメランコリーである。前者の場合，心的エネルギーの喪失によって一時的に苦痛が生じるが，その対象が他在しているためにそれは自己の部分喪失として体験される。自己は徐々にその喪失の現実を承認し，その現実を自我のなかに統合していくことで成熟していくのだという。これが「追悼の作業（Trauerarbeit）」と呼ばれるものである。しかし後者の場合には，対象が自己愛に基づいていたため，その喪失は自我とその価値の喪失を意味し，喪失の体験はメランコリックな「自我貧困化」を招くことになる。

しかし，ヒトラーという対象を失った戦後のドイツ人は，「ナチの過去に対する防御機制（Abwehrmechanismus gegen die Nazivergangenheit）」を働かせることによってメランコリックな自己価値喪失にはいたらなかったと，ミッチャーリヒ夫妻は指摘している。つまり，過去への心理的エネルギーの充当を撤回することで，過去との情緒的な架橋を断ち切り，その現実を否認したのだという。こうしてドイツ人は自らの過去を疎外し，その喪失の現実から顔を背け，現実感を喪失していった。その結果，過去の自らの罪は否認され，かつて同一化していたヒトラーだけにその罪は帰せられ，その犠牲者の運命に感情移入がなされることもなく，その苦悩は自らの喪失の苦悩によって相殺された。敗北という喪失の現実とも，その喪失によって変化した現実とも，リアリスティックに向き合うことができなくなってしまったという。

ミッチャーリヒ夫妻のこの分析は，戦後のドイツ人の過去に対する態度を理解するうえで有益であることはいうまでもない。しかし，そこには重大な問題が潜んでいることも指摘しなければならない。

第一に，集団心理学的なアプローチの問題。国民とは，多様な人間集団を一つのカテゴリーに暴力的に実体化させていくイデオロギーによって歴史的に形成された「想像の共同体」にほかならないが，このアプローチは，国民を一つの人格として分析することによって，結局はこのイデオロギーを補強してしまっている。しかもこのアプローチは心理学的現象，例えば追悼

とメランコリーを，心理学的な「正常／異常」の判断基準で評価している。追悼は国民国家の形成と維持において重要な役割を果たしているが，このような集団心理学的なアプローチは，追悼を意識的に拒否する可能性や，追悼そのものの意味を批判的に見る可能性を奪ってしまうといえよう。日本では加藤典洋[3]の議論がその典型であるといえる。彼によれば，第二次世界大戦後の日本人は，自国の戦死者を追悼しようとする保守的な改憲派の「内向きの自己」と，アジアの犠牲者を追悼しようとする革新的な護憲派の「外向きの自己」とに「人格分裂」してしまったのだという。彼はそこに戦後の日本の「ねじれ」を見ている。

第二に，崩壊と分裂の後にドイツ民族の共通性を創出し，新生国民を形成するという目的においてドイツ人の罪の問題を考察したヤスパース[4]と同様に，ミッチャーリヒの議論においても，加害を含めた過去の問題が，結局はドイツ人の国民国家形成の問題になってしまっている。自国の戦没者を追悼することで国民を立ち上げ，それによってアジアの犠牲者に追悼と謝罪を行ない，日本国民の「人格分裂」を克服しようとする加藤典洋の議論は，この点においてもミッチャーリヒと類似している。つまり，加害の問題が加害者にとっての問題に還元され，国民国家に由来する罪の問題が国民国家のための議論にすり替えられているのである。

他にもミッチャーリヒ夫妻の議論は多くの問題を孕んでいるが，次章でとくに考察してみたいのは，夫妻の「復興」に関する解釈である。二人によれば，かつてヒトラーに充当されていた心的エネルギーは戦後になって「復興」に注がれた。「罪を償う最低限の試みとして過去の本質を政治的に解明することなく，ドイツ産業を爆発的に発展させることが遂行された。骨身を惜しまず働き，それが成功することによって，過去から残っていた開いたままの傷口はまもなく覆われてしまった。」つまり「復興に向けての激しい集団的な努力」は「罪の重々しい責任を認識すること」から逃れるための「躁病的な取り消し（Das manische Ungeschenmachen）」であったという。

## 2.

第二次世界大戦でナチス・ドイツがモスクワに向かって進軍していくことによって，多くの兵士が「東方」の世界を体験することになった。そこで彼らが見たものは，「貧困」と「専制政治」がはびこる「非文明的」な世界であり，そこで体験したノミとシラミはその世界を象徴していた。[5]彼らは書簡でその世界をこう表現している。

「文化もなければ，パラダイスもない。よい街路を私たちは見かけたし，風景も悪くないが，その他といえば，どん底，汚物，そしてここを植民地化することが私たち課題になることを示しているような人間たちだ。」[6]

この「ロシア」によってベルリンは陥落し，ヒトラーは自殺したのである。戦争末期にゲッペルスはラジオ放送で，東部戦線における赤軍兵士のドイツ住民に対する「残虐行為」を強調して，対ソ戦争の士気を高めようとした[7]が，赤軍がベルリンに向かって進軍し，ドイツ領土を占領するなかで，実際に約200万人のドイツ女性がレイプの辱めを受けた。[8]赤軍のこのようなレイプや，腕時計のような貴重品の略奪を通して，ドイツ兵だけでなく，ドイツ市民もナチスの反「ボルシェヴィズム」プロパガンダの「正しさ」を確認してしまったのである。そして，

ドイツ帝国の東部領土は縮小され，そのドイツ住民と在外ドイツ系住民は，縮小されたドイツ国境内に強制移住させられた。戦時中の西方への避難とこの追放によって200万から300万のドイツ人が犠牲者となり，生き残った１200万の「故郷被追放者」の大半が無一文からの生活を強いられたのである。

「ボルシェヴィズム」をユダヤ人と結びつけ，スラブ民族の劣等性を強調する人種主義的な言説は消えたが，戦後にも東欧の「非文明」像は受け継がれていく。[9] 例えば，50年代の選挙ポスター[10] では，ヨーロッパの地図をにらみつけ，その手をヨーロッパ征服のために伸ばそうとしている赤軍兵士の姿が描き出されている。兵士の容貌が示唆しているように，その世界は「アジア」であり，この「アジア」が「文明的」な西欧世界に襲いかかろうとしているのである。

この「アジア」的な「専制政治」の下に戦後も取り残されたドイツ人がいた。赤軍の捕虜となり，「戦争犯罪人」の判決を受けて拘留期間を引き延ばされていた旧ドイツ兵である。その存在は当時の西ドイツ人の関心を集め，その「解放」は火急の政治的課題と見なされた。そのために移動展示会『私たちは警告する』が国の支援を受けて開催され，1953年に数万人が訪れた。この展示会のために作成されたポスターはその年に郵便切手にも転写されている。[11] 有刺鉄線と坊主頭――それはドイツ強制収容所の囚人のシンボルそのものであった。1955年にすべてのドイツ人捕虜がソ連から帰還したが，その３年後にこの捕虜生活の世界を描いた映画『スターリングラードの医師』が公開された。以下の写真はその一シーンである。そこには，「アジア」の監視人に率いられて，有刺鉄線と監視塔に囲まれた収容所からドイツ人捕虜が強制労働に向かう姿が描き出されている。「強制収容所」もまた「アジア」的な世界に属し，ユダヤ人やロシア人ではなく，ドイツ人がその犠牲者であった。

「スプートニク・ショック」とブラント政権の「東方政策」以来，このようなイメージは徐々に修正されていった。しかし，デタント以降に東欧世界を訪れた多くのドイツ人は，大戦中の兵士と類似した体験をすることになる。つまり，かつて故郷を追われたドイツ人は，その地を訪れたときに，経済や文化の面での後進性を実感したのである。とくに東欧における衛生観念はその後進性を裏づけるものだった。例えば，70年代初頭に出身地を妻とともに訪れたある塗装工は，かつてはヒンデンブルク大統領も宿泊したこともある高級ホテルに宿泊したが，ホテ

ル全体に漂っていた劣悪な抗菌剤の匂いに閉口し，妻は「8日後に家に帰ったけど，ハンドバックをあけると，まだそのにおいがぷーんとした」と苦笑している。[12] この夫婦はこのような高級ホテルに宿泊できることで，自らとドイツ人の経済力を確認しているわけだが，86年に旧シュレージェンを旅したあるドイツ人は，「そこで貧困がはびこっているのを見たわけなんだ。ポーランド人が東部を横領したために支払わなければならなかったツケの大きさをね」と，自分たちを追放したためにポーランド人が受けた「罰」をその貧困に見出している。[13]

ここで確認しておかなければならないことは，ホロコーストやドイツの戦争犯罪の舞台は主にこの東欧世界であったということである。そして，戦後のドイツ人――少なくとも西ドイツ人――にとってもっとも否認したいと感じていた過去は，この東欧世界における敗北と喪失の現実だった。その意味を考えるために，エメ・セゼールの『植民地主義論』から一節を引用してみたい。

「（優雅にして人道主義的かつ篤信家の二十世紀のブルジョア）がヒトラーを罵倒するのは筋が通らない。結局のところ，彼が赦さないのは，ヒトラーの犯した罪自体，つまり人間に対する罪，人間に対する辱めそれ自体ではなく，白人に対する罪，白人に対する辱めなのであり，それまでアルジェリアのアラブ人，インドの苦力，アフリカのニグロにしか使われなかった植民地主義的なやり方をヨーロッパに適用したことなのである。」[14]

この指摘には，ドイツ人がホロコーストや戦争犯罪の犠牲者に罪意識を抱かず，「感情移入」しなかった原因を解く鍵があるように思える。つまり，植民地主義者にとって生命の重みは平等ではないのである。戦後のドイツ人が「感情移入」したユダヤ人犠牲者は存在した。裕福なドイツ系ユダヤ人一家の末娘，アンネ・フランクである。1949年にドイツ語版が刊行された彼女の日記は，55年にフィッシャー文庫として店頭に並び，ドイツでこの年だけでも80万部，改

定版が出版された92年までに250万部の売り上げを記録している。[15] また，ドイツ人がユダヤ人犠牲者に「感情移入」し始め，ホロコーストの歴史に真剣に目を向けるようになるきっかけを与えたのは，アメリカのテレビ・ドラマ『ホロコースト』だったが，その主人公はドイツ在住のユダヤ人医師一家である。この犠牲者はいずれも中産階級に属する「文明的」なヨーロッパ人だったのである。しかし第二次世界大戦の開始とともに東欧世界に進軍した多くのドイツ兵が出合い，その様子を書簡で伝えたユダヤ人は，このような「文明的」ヨーロッパ人とはまったく異なる存在に見えた。[16]

「（ルブリン近くの）この村の人口は16000人だが，その14000人がユダヤ人である。それにしても，正確に言うなら，本物のユダヤ人というものは髭を生やし，汚らしく，（反ユダヤ主義新聞の）『シュトゥルマー』にいつも書かれているものよりもひどい。…この全住民が病原菌に犯され，ひどく不潔だ。ここで見せられたことは，あなたにはまったく想像できないものだ。」

「（ユダヤ人地区の）この崩れかかったボロ屋は「盗賊のどうしようもない巣窟」としか呼びようがなく，そのような地区にまだ伝染病が巣食っていないことに驚かざるをえなかった。ならず者のいるここでは，メルヘンの意地の悪い人物（魔女，魔法使いなど）のモデルを画家が探すのに時間はかからなかったのだ！」

以上の考察から判断するなら，「復興」は，責任を逃れるために過去の「傷口」を覆う単なる「躁病的な取り消し」ではない。それは，空襲と地上戦，敗戦，占領によってプリミティヴな状態まで陥った生活水準を「文明」の水準にまで引き上げることを意味したといえよう。その成功によって東欧はふたたび「非ヨーロッパ」世界として知覚され，ドイツ人はその世界に植民地主義的な視線を注ぐことができた。こうして，「非ヨーロッパ」に適用された「植民地主義的なやり方」，すなわちホロコーストと戦争犯罪は相対化され，その犠牲者は「追悼」されなかったのである。

## 3.

西に対しては「文化国家」を自負し，東に対しては「文明国家」として振舞う。これは第二次世界大戦後も含めた日本にも当てはまることであろう。日本の「植民地忘却」を可能にしたのは，「文明国家」に復帰しようとする復興の欲望と，「高度経済成長」によってふたたび「文明国家」に属することができたという矜持，すなわち植民地主義的な意識だったといえる。それは，西によって日本が植民地化されていった事実と表裏している。つまり戦後の日本国民は，西と東に対する植民地主義的な自己規定のなかで形成されたのであって，その意味で日本国民の「人格」はけっして分裂していない。保守・改憲派であれ，革新・護憲派であれ，植民地主義的な主体であるという点では違いはないからである。

現在，多くの日本人が韓国や中国の経済発展に脅威感を潜在的に抱いている。それは，東との比較において感じることができた「文明国家」としての自負に対する脅威感にほかならない。そのような人びとがとくに，「植民地忘却」や戦争犯罪の忘却と相対化に躍起になっている。今日のグローバリゼーションのなかで植民地主義がどのように変化しているのかという問題に答えることは非常に困難である。しかし，グローバリゼーションによって，貧富や生活スタイル

の既存の格差が単に拡大しているだけでなく，再編成されていることはたしかである。日本人の大半が自分を「中流」であると感じられた時代は過ぎ去ろうとしている。「豊かな」生活スタイルがナショナルなプライドの源泉ではなくなりつつあるなかで，政治的なナショナリズムが芽生えつつあることが，今日の「靖国問題」の本質であるといえよう。したがって，加藤典洋が提案するように自国民の戦没者の追悼によって日本国民が立ち上げられたとしても，その国民がアジアの犠牲者を追悼することはないであろう。

くり返せば，国民は政治・社会・文化的な闘争の暴力的な過程のなかで生み出され，実体化され，変容していく。ルナンのレトリックをもじれば，国民の存在は「日々の国民闘争」なのである。過去の何を記憶し，誰を追悼するのかは，単なる道徳的な問題ではなく，この「国民闘争」のなかで決定される。そしてどのような追悼であれ，国民として死者を追悼するかぎり，やはりそれも国民形成の過程にほかならない。「人格分裂」や「ねじれ」が問題なのではない。植民地主義に基づいて形成された国民のあり方が，そして追悼の対象を選り分け，それによって主体を形成しようとする国民のあり方が，いま問われなければならない。

## 注

1）Hannah Arendt, The Aftermath of Nazi Rule. Report from Germany, in: Commentary, vol. 10 (1950).

2）Alexander und Margarete Mitscherlich, Die Unfähigkeit zu trauern. Grundlagen kollektiven Verhaltnis, 18. Aufl., München 2004.

3）加藤典洋『敗戦後論』講談社，1997年。

4）カール・ヤスパース（橋本文夫訳）『戦争の罪を問う』平凡社，1998年。拙稿「「過去の克服」と国民形成」岩波講座『アジア・太平洋戦争１』月報　2005年を参照。

5）Albrecht Lehmann, Krieg – Urlaub – Gastarbeiter. Zur Erfahrung >des Ausländers< in der Lebensgeschichte von Hamburger Arbeitern, in: Archiv für Sozialgeschichte 14 (1984), S.461. Hans Joachim Schröder, Die gestohlenen Jahre. Erzälgeschichten und Geschichtserzählung in Interview: Der Zweite Weltkrieg aus der Sicht ehemaliger Manschaftssoldaten, Tübingen 1992, S.433f.

6）Thrilo Steinzel, Das Rußlandbild des ‘kleinen Mannes’, München 1998, S.75.

7）Gebbels-Reden, Bd. 2: 1939-1945, hg., Helmut Heiber, Düsseldorf 1971, S.429-446. Vgl., Wolfram Wette, Das Russlandbild in NS-Propaganda, in: Wolfram Wette und Gerd R. Ueberschär, (Hg.), Stalingrad : Mythos und Wirklichkeit einer Schlacht, Frankfurt/M. 1992.

8）Norman M. Naimark, Die Russen in Deutschland. Die sowjetische Besatzungszone 1945 bis 1949, Berlin 1997.

9）Vgl., Arnold Sywottek, Die Sowjeunion aus westdeutscher Sicht seit 1945, in: Gottfried Niedhart (Hg.), Der Westen und die Sowjetunion, Paderborn 1983.

10）Hans Bohrmann, (Hg.), Politische Plakate, Dortmund 1984, S.450.

11）Vgl., Robert G. Moeller, War Stories. The search for a usable past in the Federal Republic of Germany, Berkeley, Los Angels, California 2003, P.40.

12）Lehmann, Krieg, S.468.

13）Albrecht Lehmann, In Fremden ungewollt zu Hause. Flüchtlinge und Vertriebene in Westdeutschland 1945-1990, München 1991, S.133.

14）エメ・セゼール（砂野幸稔訳）『帰郷ノート　植民地主義ノート』平凡社2004年，138頁。

15）Wolfgang Benz, Mythos Anne Frank, in: ders., Bilder vom Juden. Studien zum alltäglichen

Antisemitismus, München 2001, S.86.

16）Volker Ulrich, >Wir haben nichts gewusst< – Ein deutsches Trauma, in; 1999: Zeitschrift für Sozialgeschichte des 20. und 21. Jahrhunderts, H.4, 1991, S.35.